

# 池田みち子「国際都市」論

—統制下の暗潮—

はじめに

池田みち子は『三田文学』昭和十五年五月号に芥川賞候補に選ばれた「上海」を発表し、それを皮切りに、昭和十九年まで上海を舞台にした小説や随筆など、十数編の〈上海もの〉を『三田文学』に投稿した。「国際都市」は、昭和二十四年一月の『日本小説』新春特大号に発表された中編小説で、その全文が発表される前に、一部は「邦人商社」という題目で、昭和十九年三月に『三田文学』で発表された。「邦人商社」の同時代評では、「筆触剛健、しかも支那事変を契機に支那へ渡つた一と旗組の野心家、不良外人、純情なタイプピストと報道班員から商人に転向したその愛人など、相当、複雑な人物を見事に描きわけ、僅々三十五六枚のなかに浮き彫りのやうに活躍せしめ、大東亜戦争前

の魔都上海の空気を存分に描き出してゐる点、全篇が相当の力作である」と賞賛された。これらはすべて単行本に収録されなかつたが、上海の居留民の間で国策的な言説が幅を利かせていく状況において、池田の〈上海もの〉は突出した作品であると高く評価されている。

池田みち子が「本領とする上海ものの総決算」と言われた「国際都市」は、昭和十五年の上海を舞台とし、日本人小商人の一日を中心に展開する。大橋毅彦氏の研究<sup>①</sup>では、「血眼」になつて利を稼ごうとしても、結果的には「ほそぼそ」とした利しか得られない小商人を踏みつけにして巨利を貪っていく大財閥だけが、非難されず安泰なのはおかしいではないかという思いを強くするのである」とし、「軍部や政府が主導して進める〈立派〉な施政を刺していく棘」を小説によって示し得たことが指摘さ

邵 金 琪

れている。

この小説では、漢口で正庄洋行を經營する正好が主人公で、彼は金の工面のため上海に戻り、呉淞路にある保子の部屋に泊まる。翌朝、ブローカーの山崎の二匹の犬が盗まれ、その出来事を発端に、山崎の事務所に入入りしているロシア人と思われるカリニンや、正好が借金を頼もうとする小川正造が經營する隆栄洋行で働く王斗鎔といった各国出身の人物たちが登場する。日本人の正好、山崎などを中心に描かれた日本人居留民社会の構図は国際都市上海のイメージの一部に過ぎず、小説に登場した中国人、ロシア人も見過ごすわけには行かない存在である。盧溝橋事件後、日本政府は統制の強化を図るために「東亜新秩序声明」を発表し、經濟開發政策のもとで国策会社が次々と設立された。そのような状況のなかで、上海という国際都市の日本人コミュニティにおける「会社派」と「土着派」にはどのような対立があったのか、そして上海に住む中国人や外国人がいったいどのような生活をしていたかということとを、本稿では、当時の上海日本人居留民や上海の經濟情勢を考慮に入れながら分析していく。国際都市上海に住む各国の人々は、日本の統制下でどのように生き抜いていたのかに焦点を当てれば、盧溝橋事件後の国際都市上海における日本人居留民社会はもちろ

ん、統制下の上海の多面的なイメージも明らかにすることができるとはならないだろうか。

### 一、池田みち子が捉えた上海の都市空間

池田みち子は、昭和十五年から昭和十六年にかけての一年間、二度目の上海体験をした。「ほんの一月のつもりで上海に行つたまま、その大都会の混濁に気を引かれて、もつといつまでもそのなかに身をひそめてゐたいと思ふやうになつた。が、短い滞在のつもりで持つてきた金では、さうながく食べられるわけもないので、私はある通信社に（日本人經營の）貧しい職業を見つけて働くことにした」という池田は、四川路の中国通信社<sup>(6)</sup>で働きながら、上海を舞台にした小説や「上海の裏街」、「若い日本人たち」、「上海風景」などの随筆や評論を『三田文学』に投稿した。当時の彼女の消息は、『三田文学』の編集後記や消息欄にも確認できる。その時期はちょうど「国際都市」の物語の時期と重なっている。

池田が捉えた上海は、日本人を中心ではなく、中国人やロシア人などの生活も詳しく描かれた。昭和十五年の統制下の上海に住む各国の人々の生活が書けたのは、彼女がフランス租界

の中国人と一緒に住んだおかげである。そして彼女自身が日本人の経営する会社に勤めた経験を通して、当時の上海の経済情勢や日本人サラリーマンの生活などもよく把握している。池田は上海のさまざまな社会の動き、日本人居留民社会、「華洋雜居」の租界生活などを熟知した上で、国際都市上海の都市空間のイメージを浮び上らせている。

女一人で上海に渡った彼女の上海生活の印象は、国策の統制が高まっていく時期であったせいか、他の時期に他の作家が上海に持ったイメージとは違う、一種独特な感覚である。

上海に政治的暗殺が屢々行はれるのは有名ですが、毎日の新聞を見ると、頻々とおこる金銭目的の人さらひや押入強盗は、どれもこれもがピストル事件のやうです。(中略)かういふ記事だけを読んで上海を想像すると、いかにも上海は犯罪都市のやうに思われるでせう。また、僅かの日数を上海滞在して、支那芸者、ハイアライ、競馬、酒場のロシア娘など見物して歩けば、上海は、さぞ、エキゾチックで享樂的で、「上海の花売娘」や「上海ブルーズ」で唄われてゐるやうなロマンチックなものにも思われるでせう。だけど、この裏長屋の窓からのぞいた上海の生活は平

和で、貧乏で家族的で、そして健康だと思へます。<sup>(7)</sup>

昭和十五年の夏、池田は一般の日本人と違い、日本人が集まる北四川路の周辺地域には住まず、「国際都市」冒頭の保子の住所と同じく中国人が集まる「里」に、朝鮮人とポルトガル人の混血児と言つて住んでいた<sup>(8)</sup>。池田以外の住人は全て中国人であった。その里は「華洋雜居」のフランス租界にあり、池田は中国人と日本人以外の外国人の生活にも触れるようになった。

彼女がそこに住むようになったのは、作品創作のためではなく、当時住宅不足の上海では、なかなか空き部屋が見つからなかったからである。池田が住んでいた「里」は二階建ての六十軒ばかりの長屋で、長屋の入り口には一人のインド人の門番がいて、夜になると門を閉めてしまう。この裏町の長屋は袋のやうな構造で、唯一の出入り口は表通りに面した入口である。周囲は刑務所のような高い壁で囲まれているから、夜になって入り口さえ閉めれば、長屋全体が外部と遮断されるのである。「国際都市」は保子の部屋に泊まっていた主人公正好が朝起きると、保子が住んでいるところで起きた犬の盜難事件からはじまるが、盜難に遭つた時刻が夜ではなく、朝になってからという設定は、池田の生々しい体験があつたからである。

池田のエッセイの中で、一番詳しく自分の生活を描いているのは、中国人のように上海の夏を体験した話である。まだ夜の明けきらぬ時刻に、「おわいや」が叫びながら「里」を周り、その声で起こされる人たちは各自の便器を持ち出す。竹で便器を洗う音を聞き、一日がはじまる。朝のうちは男たちが働きに出て不在で、女は買い出しなどをする。日本と違い、上海の昼は二時間の昼休みを過ごし、午後五時の仕事になる。午後五時になると、夕飯を済ませ、椅子などを外に持ち出して夕涼みの時間である。夜になると、部屋で麻雀やトランプなどの賭博をする。麻雀の音は翌日の朝四時まで続く。二ヶ月以上そこに住んでいた池田は完全に慣れ切ることができなかったが、中国人並みに「里」での生活が平気になった。中国人の貧乏な生活を見た池田は決して険悪感を抱かず、平和な居心地の良い生活を手に入れたのではないか。しかし、そのような平和で家庭的な雰囲気は、「里」を出たら消えてしまう。歩道の端に、餓死寸前の中国人がいて、そのすぐそばで苦力や黄包車の車夫を相手に小さい店が開いているが、客は道端で死にかけている中国人のことに無関心であるというような中国人の「上海的無関心」について、池田は何度も言及し、最後は自分のそばで人が餓死しても少しも気にしないであらうことに慣らされるかもしれない

ないと感じていたようだ。

池田が上海にいる間に、日本政府による経済統制は次第に強まっていった。国策会社が次々と設立され、巨大資本が上海の市場に回ったが、それは上海に生活していた一般の日本人の生活に良い影響を及ぼすとは限らなかった。池田は日本人が経営する通信社で働きながら、上海の経済情勢や普通の日本会社勤めの貧しい生活をしている日本人に目を向けている。周囲の若い日本人サラリーマンは、「小刻みに」前借りを重ねて上海での生活が苦しくなっていたのに対し、池田が上海に来たばかりの時の案内人の日本人たちは、自家用車を持っていて裕福な暮らしをしていた。同じサラリーマンと言っても、「三井物産とか、台湾銀行とか内地で雇われた社員が上海支店へ転動してきてゐるやうな一流会社は、海外手当などがまるで桁が違つてゐる。それにまた、同じ資本の小さいところの安月給取りでも、それぞれの会社にそれぞれの気風があつて、内地の生活ほどに堅気に、誰れもが小じんまり暮らしてゐるところだつてあるのだらう」とあるように、格差は池田の身の回りで見られた。「前借してでも遊びたくなるだらうし、それできない時は、仕方なく腕時計をばづしてもそれで酒を飲みにゆきたくなるだらう。そして、さういふ生活のすさみかたが、貸りられるだけ貸

りてあととは返さない恥知らずに、支那人のコーヒー屋を借りたほしたり、黄包車の車夫を道端でなぐりつけたりするやうな、日本の国策の高さを日本人自身が疵つける結果になる」といった日本人サラリーマンの生活を池田は鋭く批判している。

また、池田は時々日本人街と呼ばれる虹口まで出かけることもあったが、日本軍は上海の租界以外の地域へ政治統制も強化し、特に抗日テロや革命への鎮圧に力を入れるようになった。昭和十五年の暮れ、日本人にとって「テロと云へば河向かふに限られてゐたが、それが近頃では虹口の日本軍の整備地域でも頻発するやうになつた。が、今迄にこれほど嚴重に日本人まで通行止にされたことはなかつた。」<sup>①</sup>というように通行止めの範囲も大きくなつていった。さらに、池田がガーデンブリッジ・ガーデンで出会つた中国人青年たちは日本に興味を持っているが、「抗日新聞の報道するまま」を信じている彼らに、池田は「日本の方針を理解させなければならぬ」という義務を感じたと書いている。

小説「国際都市」の場合、池田は二度の上海体験をもとに、中国人が集まる「里」とフランス租界の住居のイメージを統合し、中国人、日本人、ロシア人が混在する混沌とした物語空間を立ち上げた。また、勤めていた中国通信社には中支経済研究

所があり、日刊経済情報紙『支那経済』を発行していたため、上海の経済情勢を熟知し、それらは「国際都市」という邦人商人を中心に描く小説の土台となつたと考えられる。

## 二、統制下で生きる日本人たち

小説「国際都市」には、昭和十三年と昭和十五年の小商人正好の生活が描かれている。戦争時の昭和十三年の正好は戦争の間隙に乗じて、兵隊相手に商品を買って懐を肥やし、その金で遊び続けた。しかし、昭和十五年になると、金がなくなり、自分の恋人へもわずかの金しか渡せず、うらぶれた状態に陥つた。以下では、この二年間、正好のような小商人は日本政府が占領した上海でどう生きたのかを、特に日本軍の統制による上海の日本人社会の変化に注目しながら考察していく。

昭和十二年七月七日、北京郊外に盧勃発した溝橋事件は、八月十三日、上海に飛び火し、第二次上海事変が起こり、日中全面戦争に発展した。十一月十二日、上海の華界が日本軍の占領下に置かれ、上海租界も完全に包囲されることになった。その後、広東、武漢が相次いで陥落した。日本軍は中国での統制を強くするために、「東亜新秩序声明」<sup>②</sup>を発表した。

帝国政府は十一月三日事変処理に関し左の如き方針を中外に宣明した。

(中略) 帝国希求する所は東亜永遠の安定を確保するべき新秩序の建設に在り、今次征戦究極の目的亦此に存す。

この新秩序の建設は日滿支三国相携へ、政治、経済、文化等各版に互いに互助連環の關係を樹立する。

また、昭和十三年十二月二十二日の「日支国交調整に関する近衛声明」の中に、「全支における日支平等の原則に立つ経済の促進」や「支那内地における居住營業の自由」など、東亜新秩序の建設における具体的な条件も述べられた<sup>(14)</sup>。これらの条件により、国策会社はもちろん、一般の日本人が經營する会社も続々と設立された。日偽政府の成立や、財政、貿易などの措置で、上海への各方面の統制は徐々に強まり、正好のような日本人小商人の生活は一変した。

主人公の正好は、日中戦争期に新聞社の特派員の仕事をやめ、自分の会社を設立し、上海で仕入れた靴下やシャツなどの紡績品と日用品を日本兵隊相手に売るといふ商売をはじめた。そして、現地の人と商売するために、中国人の仲間も受け入れ、一

時的に商売は繁盛した。

しかし、やがて日本軍は当時の戦争の成果を維持するため、日本軍の統制下の経済政策として、北支と中支の開発を提示し、その方法として北支開發会社と中支開發会社という二つの国策会社を立ち上げた。中支開發会社の本社は上海にあり、「若干の資本輸入を必要とすることは云ふまでもない。電力、瓦斯、水道、交通、鉱業には国策的資本の進出が必要であり、その他の一般産業に対しては、諸本の自由進出を誘導し、無用なる競争を統制する必要がある<sup>(15)</sup>。」という方針のもとに經營された。盧溝橋事件後、日本軍や日本政府が指揮していた経済開発は昭和十三年に発表された声明の経済建設における核心であり、重要産業の国策会社の設立以外に、各産業に対する資本の進出が促進され、三井物産のような大財閥が、上海から中国の内陸へ進出していくようになる。それにともない、日本政府と中国の国民政府による小商人に対する統制も強くなった。それ故、日本の軍部も政府も、正好のような「日本人の小商人の邪魔」をし始め、「内地から輸入される物資も支那でできる物資も、次第に強力に統制されるなら、さういふ物資が最後の消費者に渡るまでに、その度に価格が上昇する小さい商社の手を幾度もとほることはいなくなりそうに思へた。帯留や支那靴さへ、正好の手へまではま

わつてこなくなりさうなのである。」という窮地に彼は陥っていた。物資の統制で、商売できる商品の数は激減し、小商人の正好は商売できる商品を他に探さなければならなくなったのである。

また、正好が主に扱う綿製品業界の統制下の状況を『大陸年鑑昭和十五年』<sup>(16)</sup>で見ると、「事変後における上海綿糸布相場の動きを窺ふに、戦火による生産設備の破壊乃至は停業に伴ふ供給激減から実需の減退にも拘らず事変直後相場は急騰した。尤も昭和十二年の暮れから十三年の春にかけて騰勢一服となり、相場は若干引弛んだ。これは華人紡績を除き外人紡績の被害が比較的軽微となり、戦火が西に移ると共に逸早く操業を再開したので、実需が減退してゐる際とて、やや供給過剰の形になったことも原因とみられる」とある。しかし、上海における綿糸布相場の反落はごく一時的な現象に過ぎなかつた。「昭和十三年ごろから相場は再び騰勢に転じ、支那糸の如き同年十月頃には未曾有の新高値を現出した」のである。紡績産業は日本政府にとって大量投資の産業であり、日本の工場で生産された糸は市場で有利な立場を保つ必要がある。その為、統制で高くなつた綿製品は流通が難しくなり、日本人小商人のところになかなか回らず、その結果、彼らは、中国人と競争しなければならなかつた。

正好のほかに、中国での商売がうまくいかないもう一人の日本人として、家主から一軒の住宅を借り、その中の二室を他の人に貸すことで家賃を稼ぐブローカーの山崎もいた。大財閥による巨大な資本が各業界に流れ込むことで、小商人やブローカーの居場所はなくなり、上海居留民社会における「土着派」一般民衆と「会社派」エリート層の対立がさらに激化していった。高網博文氏の『国際都市』上海のなかの日本人<sup>(17)</sup>には、「土着派」と「会社派」といった日本人居留民社会における対立発生の原因が、以下のようにまとめられている。

一つは「欧州戦後支那に於ける日本企業の進出、特に紡績工業の上海進出と共に在留民の増加著しく、在留民の増加は那人社会の複雑化」を招いたことと、今一つは「その頃の居留民は段々自治体の政治知識に目覚めた」ためと言われる。(中略) 居留民居住地分布及び職業構成を勘案すると上海日本人居留民は三%ほどの「会社派」エリート層、四十%ほどの「会社派」中間層、その他の「土着派」一般民衆に区別できる。エリート層は商社・銀行支店長、高級官吏、会社経営者などで、旧イギリス租界やフランス租界に居住していた。中間層は紡績会社・銀行・商社などに勤

務する給与生活者を中心としており、彼らの多くは社宅やアパートメントに居住していた。一般民衆層は中小商人層、中商工業の親方・職人職、飲食、サービス業者、各種の雑業層、無職の下層民から形成され、主に、「日本租界」と俗称された虹口や華界の閘北区に居住していた。

上海の日本人居留民社会は長い間、「土着派」と「会社派」に分けられ、「会社派」は「土着派」より有利な立場に立っていた。盧溝橋事件後、大量の国策会社の設立、大財閥の資本の流動などによって、一般の日本人は国の恩恵を受けられず、正好や山崎のような小商人たちは経営難に陥り、生活が苦しくなった。不利な立場の下層日本人居留民は、大財閥への嫌悪を募らせ、「会社派」と「土着派」の間の対立はさらに悪化したのである。

日本人小商人の身に起きた激変について、池田の「若い日本人たち」には、「戦争の直後、雨後の筍ほどに内地から移住した、そして最初の頃は相当の利益をあげてゐた商人たちが、その後戦後の建設がすすむにつれて、最初の夢も破れて身動きできなくなつてゐた」とある。身動きできなくなった商人たちにとつて残つた道はただ二つ、山崎のようにいきなり消えて、他の地

域に逃げるか、あるいは借金をしてなんとかするかだった。池田の周りにいる若い日本人サラリーマンも借金の繰り返しで、「まるで返却されることのない、それよりも最初から返すつもりなぞまるでない」のである。彼らは、借金しても自分の生活の水準を下げるつもりもなく、「後のことなぞ考へずできるだけ沢山借りた」あげく、「食べられるところさへなくしてしまつてゐた」が、彼らの生活スタイルには「上海の享乐的な土地柄と日本人の性格が含まれていて、普遍性を持つ」と池田は述べている。

小説「国際都市」では、統制下の商売が難しくなり、この難局を乗り越えるために、借金するしかなかった。正好が考えた借金の相手は、これまで世話になつた小川正造である。正好は今までの自分の信用があれば、小川から借りられると考えたが、彼に断られる。正好の商売には将来性が見えなくなり、返済のあてもなかったからである。上海に來た日本人が持つ「借りられる金は借りてしまった」という借金に対する考え方は、最後に自分を追い詰めることにしかならないのである。

中小商人である「土着派」の商売の基盤は極めて脆弱で、日本の統制により、失業したり、商売できる商品がなくなつたりするなど、下層居留民たちの生活空間は圧迫された。しかし、



彼らは統制の波に晒されながらも、何とか生き抜こうとする。池田みち子は、この小説において中小商人たちを取り上げることで、上海に住む下層の日本人実態を描き出している。さらに、正好によって財閥を批判させることで、国際都市上海における日本人居留社会の対立を浮き彫りにしている。

### 三、「浮草」のようなロシア人

近代上海では租界を通じたいわゆる「華洋雜居」が持続していた。昭和十五年の上海の人口構成は、もちろん中国人によって大部分が占められていたが、国際都市としての上海の外国人における日本人同士の対立に目を向けているだけでなく、日本人社会にうまく馴染んでいる中国人やロシア人のことにも関心を持っていた。小説には、日本人以外の登場人物として、盗犬事件の中心人物のカーニンと王斗鎔、そして、正好の正庄洋行で働いている崔元道についても書かれている。彼らが日本の統制下でどのように日本人と接触しているのか、それぞれの生活スタイルを分析することで、国際都市上海という特殊な都市空間でたくましく生き抜く彼らの姿が明らかになると考えられる。

小説の中に登場するロシア人と中国人はいずれも日本人小商人に協力する立場であったが、徐々にその立場は変わりつつあった。まずカーニンは、「ポーランドだと云つたり、スエーデンと云つたり」することや、「友達みんなが白系ロシア人」とあることから、多分国籍など持たず、上海に放浪する白系ロシア人であろうという推察される。『抗日支那の真相』によると、白系ロシア人は革命後世界各地に亡命していたが、その大多数はポーランド、ルーマニアについて、中国に亡命している。昭和十一年には、上海の白系ロシア人は二万五千余名に上ると言われ、彼らの上海での生活は以下のように述べられている。

之等の白系露人の大多数は殆ど無一文であつたが、その多少の資金を有するものは漸次商売を始め、旧白軍の軍人の如きは共同租界及佛租界工部局、電信局、電話局、電話会社等に就職する外、各自の専門技術を応用して、各国外人商社に就職、婦女子等の大多数は商店の売り子、酒場の女給、ダンスホールの踊り子として働き、生活前線に乗り出して白系露人社会の建設に力を注いだ。

「たとへ貧乏してゐても立派に暮らしてゐる」白系ロシア人

は上海にたくさんいた。ところが、最初上海に着いた時、金がなかったカーリーニンたちは異郷で生き残るため「破廉恥」な行いをするようになった。山崎が飼っている犬も、彼の仲間が盗んだものであり、最初は安く山崎に犬を売りその後もう一度、カーリーニンの仲間が山崎のところから犬を盗み、彼は犬を連れ戻すという約束で、さらに山崎に金銭を要求する。この場面では、彼と仲間はグレー地帯に住む犯罪グループというイメージで描かれている。

上海に亡命してきたカーリーニンは、正好と出会った時は多言語を自由に扱う才能を持つ人物であった。彼の本業はカフェの「ボーイ」で、その仕事を利用し、自分の語学力を磨き、日本語、中国語、上海語が達者で、自分の特技を生かして、日本人小商人の商売を手伝うような仕事もやっていた。「少しも悪いこととは思はないほど麻痺してしまった人間の心」と、何十銭、何十圓といふどんな小さなお金でも稼ぎたいという逞しさも持っていた彼は、猛犬を連れて黄包車の車夫を脅し、二十銭で黄包車に乗ったり、たったの三十圓で山崎と喧嘩し、初対面の正好に山崎の犬を売ったりするなど、「破廉恥を通りこして」「悪に透徹できる」ようになってくる。カーリーニンは泥棒白系ロシア人グループに入らず、彼らの盗みには参加しないが、盗品を売っ

て利益を得る段階になると、簡単に彼らを裏切り、自分だけが利益を得る。カーリーニンは国籍、故郷を捨て、誰かに頼ることもなく、少し悪いことをしても、独り身で上海で生き抜こうとする存在であり、何処にも属さず、生きるためならなんでもできる「国籍さへもない浮草」のような人間として描かれているのである。

#### 四、統制下で活躍できる中国人たち

小説でロシア人と対照的な存在は中国人たちであり、特に日本人のもとで働いている王斗鎔と崔元道は、正好の商売にとって状況を逆転させた鍵となる人物である。

日本の経済統制が始まる前は、日本人小商人と中国人商人達は競争の関係であったが、統制下で「日本人街」と呼ばれた虹口地区では、日本人が中国人を商売相手にする状況が増えていった。小説には正好が統制下の虹口地区を訪ねたことが、以下のように描かれている。

今年の春、つまり半年前に久しぶりで上海へきた正好は、まだ小さいと思つてゐる双葉の虹口が、いきなりあて

やかに花開いてしまつたのに驚かされた。通行証の制限なしに中国人が自由に虹口へ出入できるやうになつて、川向うで箱づめになつてゐた支那人がどつと虹口へあふれたのだ。(中略) 中国人の煙草屋、中国人の洋服屋、両手がかへるばかりの雑貨を並べた路傍商人まで賑やかに客を呼んで、青い木綿の支那服が虹口の街主流になつた。

日本人と中国人の関係は、最初は隔たりがあり、中国人は「日本人街」に自由に出入りすることすらできなかったが、やがて商品の流通によつて経済面での繋がりが強まつていった。小商人の日本人と中国人が生活上で交流を深めたことは、虹口の横丁が「いきなり賑やかな支那街にかはつてゐた」という表現から読み取れる。「困窮の果てを生きてゐる」中国人は、逆に小さなお金を稼ぐ必要がある正好のような日本人にとって「羨ましい」存在であつた。

統制下で「土産品の買付や仲間同士の仲介でさやを稼ぐ」と血眼になつてゐる小商社は、「日増しに窮屈になり、物品の出入は不自由」になつたため、やむを得ず仕入れと商売の相手を日本人から中国人に変更した。その結果、中国人とやりとりできる人が必要になり、そこで活躍できたのが崔元道である。

崔元道はいつも日本語がわからないまま、「中国人だけを相手にかけずりまはつて稼いでゐた」が、そのおかげで、統制の不正にあつても、正好の経営する正庄洋行が倒産せずに済んだ。崔元道は自分の知恵で洋行の仕入れ先と顧客を増やしたので、正好はそのことから、中国人を「自分の身内」に加え、「支那で仕事をするための秘訣をわかつた気がした」とある。さらに、南京の商売で千圓を損失した時、崔元道が正庄洋行の「半分を煙草、雑貨、菓子などを商ふ小売商に改造」し、「食べる位の利益」を必ず儲けるといふ提言をしたのに対して、正好は改造の資金がなく、「借金が嫌だ」といふ理由で断わろうとするが、そこには崔元道の売人としての柔軟な金銭意識があつたと考えられる。

また、小川正造の隆栄洋行で働く王斗鎔は、流暢な日本語を利用して、日本人と他国の人の間の商売の仲介人を務める。盗まれた犬ということを知りながらも、うまく日本人とロシア人の間を斡旋し、大金を稼ぎ、正好の商売の困窮を知つた後、誰かに借金して新しい商売でも始めるべきだといふ崔元道と同じようなアドバイスを正好にする。中国で商売経験のまだ浅い正好が、「くさくさしてゐるときに、このうへ借金をせおつたら後から前からも追ひたてられる」といふ借金意識を持つてゐる

のに対して、二人の中国人は、「必要な金を借り出すのは、金を儲けると同じ」というのであり、二人の中国人の商売のうまさを読み取れる。池田の周りにいる若い日本人の借金意識のように、日本人には、借金をしたら最後に「食べられるところさへなくしてしま」うという認識があり、簡単に借金しようと思わないが、反対に、中国人にとって借金は金を産む方法としか考えられていない。統制下の上海では、窮地に追い込まれた中国人商売人が柔軟な金銭意識で商売を続けるようになる。

中国人の崔元道と王斗鎔は商売上手で、これまではサポート役として日本人経営の会社で勤めていたが、経営状況が困難になったとき、正好のような日本人小商人にとって彼らと手を組むところが、生き延びる為の最後の道となっていく。日本人小商人が中国人の金銭意識に影響され、中国人の社会にもう一步踏み込むようになる様子が見事に描かれている。

小説の結末は、「東亜新秩序声明」に書かれたように、「日滿支三国相携へ、互いに互助連環の關係を樹立する」ことを暗示していると考えられる。併せて、「国際都市」上海において、必死に生きる人々の姿も、上海の実態の一部として描き出されている。池田みち子は、日本の政策における上海日本人居留民の営みを中心に書いたが、カリーニン、崔元道、王斗鎔のよう

な日本人たちの周りにいる他の国の人々の生き様を日本人の生活と絡み合わせ、上海の暗部を重層的に表現している。

#### 終わりに

池田みち子が発表した最後の「上海もの」である「国際都市」は、日本人コミュニティである虹口を主要な舞台とし、日本政府が提唱した統制が実施され、上海の経済が回復しつつあるなか、日本人同士の不和が生じ、中国人と日本人の行き違い、外国人と日本人の衝突など、事変に明け暮れた昭和十五年の上海の光景を描いている。日本軍や日本政府が掲げる上海再開發政策という経済統制の波に乗っている日本の会社が急速に発展していく反面で、良心の抜け穴をこしらえて金を稼いでいる人々の生活は、まさに戦時上海に存在する闇の部分である。「国際都市」の創作にあたり、池田みち子は意識的に日本の統制を背景とし、上海日本社会における大きな変化と各国の人々の生活実態を鮮明に捉えているといえるだろう。

#### 〔注〕

(1) 保高德蔵「最近の作品（文芸時評）」『文藝首都』（昭和

十九年六月一日)

- (2) 大橋毅彦「明朗上海に刺さった小さな刺——池田みち子の〈上海もの〉をめぐって」『アジア遊学』一六七号(平成二十五年八月)

- (3) 和田芳恵「編集後記」『日本小説』(昭和二十四年一月一日)

- (4) (2) に同じ

- (5) 池田みち子「若い日本人たち」『三田文学』(昭和十七年八月一日)

- (6) 和木清三郎「消息」『三田文学』(昭和十五年十二月一日)

- (7) 池田みち子「上海の裏街(承前)」『三田文学』(昭和十五年十二月一日)

- (8) 池田みち子「上海風景」『三田文学』(昭和十七年一月一日)

- (9) (5) に同じ

- (10) 同前

- (11) (8) に同じ

- (12) (7) に同じ

- (13) 「東亜新秩序声明」『昭和十五年朝日年鑑』(昭和十四年十月二十日)

- (13) 馬郡健次郎『大陸経営』巖松堂書店(昭和十三年六月十日)

- (14) 日本国際協会太平洋問題調査部編『最近日支関係史——太平洋問題資料(7)』(日本国際協会、昭和十五年一月十七日)

- (15) 大陸新報社編『大陸年鑑昭和十五年(民国二十九年版)』(大陸新報社、昭和十五年一月十五日)

- (16) 高網博文著『国際都市』上海のなかの日本人(研文出版、平成二十一年三月二十三日)

- (17) 中国通信社編『抗日支那の真相』(平野書房、昭和十二年八月五日)

- (18) 上原蕃『上海共同租界誌』(丸善株式会社、昭和十六年十二月)

〔付記〕

・「国際都市」の本文の引用は『日本小説』新春特大号、昭和二十四年一月一日に拠る。

・本稿は、関西大学国文学会の令和二年度第二回研究発表会(二〇二〇年十二月十九日)における口頭発表に基づくものである。発表に対しご教示を賜った皆様や、発表の機会を与えてくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。

(しょう きんき／本学大学院生)